

## よりふね 寄船・寄物と宗像沖ノ島祭祀遺跡

伊藤 慎二

### I. 「活きた遺跡」の学術的評価

宗像沖ノ島祭祀遺跡（福岡県宗像市）は、2017年7月に「〈神宿る島〉宗像・沖ノ島と関連遺産群」の構成資産の代表としてユネスコ世界文化遺産に登録された。落ち葉をわずかに掻きわける程度で古代の祭祀の痕跡が地表に顕わになるという、世界的にも稀有な人類史の重要性を有する考古学的遺跡である。そして、沖ノ島祭祀遺跡出土の約8万点の考古資料は、すべて国宝に指定されているのみでなく、宗像大社の神宝としても位置づけられている。沖ノ島祭祀遺跡の世界文化遺産の登録にあたっては、日本国内有数の神社神道の古社として知られる宗像大社の信仰との継承関連性も評価されている。沖ノ島祭祀遺跡は、宗像大社沖津宮としてのいわば「活きた遺跡」であることも重要な特質である（図1・2）。

他の同時代の祭祀遺跡やその出土遺物に比べて宗像沖ノ島祭祀遺跡とその出土遺物の質と量の傑出性に関する解釈として、国家的祭祀や朝鮮半島・中国大陸方面への航海安全祈願との関連性がほぼ定説となっている。しかし、近世までの伝統的信仰体系の解体再編により創出された近代の神道（安丸 1979）以前の宗像大社の信仰と地域の長い歴史を振り返ると、さらに多様で重層的な解釈が成り立ち得る余地があると考えられる。



図1 宗像沖ノ島 ※筆者撮影



図2 宗像大社沖津宮と沖ノ島祭祀遺跡 ※筆者撮影

## II. 宗像沖ノ島祭祀遺跡の考古学的位置と評価

### (1) 沖ノ島祭祀遺跡の位置づけ

宗像市出身の出光興産社長出光佐三は、宗像大社の神域を整備し、その祭祀を本来の姿に復することを目的に、「宗像神社復興期成会」を立ち上げた。そして、アジア太平洋戦争中の軍守備隊の駐屯や漁港修築工事の進行などにより、「古来神島としての深い信仰から、一木一草といえども島外に持ち出すことを許さない厳重なタブーも、ややもすれば侵されんとする状況」を憂慮して、沖ノ島祭祀遺跡の学術発掘調査の実施委嘱を決断した（鏡山・原田ほか 1958：1頁、伊藤 2013）<sup>1)</sup>。

1954年から1971年にかけて3次にわたって実施された宗像沖ノ島祭祀遺跡の学術発掘調査成果は、2巻5分冊におよぶ報告書としてまとめられている（鏡山・原田ほか 1958・1961、岡崎・小田ほか 1979）。最近では、世界遺産登録に向けて多様な調査研究が進展し、それらの成果は『〈宗像沖ノ島と関連遺産群〉研究報告』Ⅰ～Ⅲにまとめられるなど、その関連研究成果を収載した書籍・論文などは膨大多岐にわたる（岡寺・大高 2018）。これらの調査研究の結果、宗像大社沖津宮社殿背後の巨石群周囲に合計23地点の祭祀遺跡の存在が把握され、下記の4段階の変遷過程状況（小田 1979）を反映していることがほぼ共通理解になっている（図3）。

岩上祭祀段階（Ⅰ段階：4世紀後半～5世紀）：16・17・18・19・21号遺跡

岩陰祭祀段階（Ⅱ段階：5世紀後半～6世紀）：4・6・7・8・9・10・11・12・13・15・22・23号遺跡

半岩陰・半露天祭祀段階（Ⅲ段階：7世紀～8世紀）：5・(14)・20号遺跡

露天祭祀段階（Ⅳ段階：8世紀～9世紀）：1・2・3号遺跡

各段階の祭祀遺跡の性格については、おおよそ次のように把握されている。岩上～岩陰祭祀段階は、17号遺跡や7・8号遺跡などの銅鏡・刀剣・車輪石・勾玉や挂甲・馬具・鉄製石製模造品等の出土遺物が、畿内の主要な一古墳出土の副葬品量にも匹敵する。こうした状況から、宗像神の祭祀が地方的独立勢力

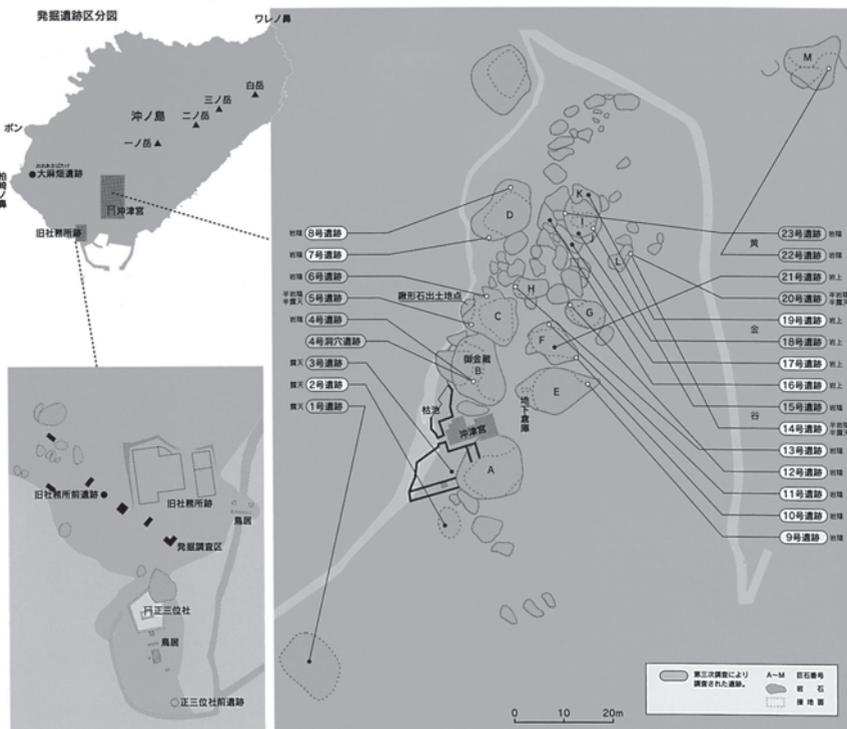


図3 宗像沖ノ島祭祀遺跡の位置 出典：(小田監修 2003)

のみを背景として成立したものではなく、ヤマト政権の国家神として成立したことが調査初期の段階から推察されている（鏡山 1961：287-288頁）。そして、宗像周辺地域の海人族の信仰からはじまった沖ノ島祭祀は、やがて宗像氏が司祭となる。そこに、4世紀後半の朝鮮半島の三国の抗争に介入したヤマト政権が沖ノ島祭祀にも関与し国家的祭祀の場となったことが、現在ではおおむね定説化している（小田 2011：49頁）。

また、2次調査まで解釈が定まっていなかった露天祭祀段階についても、3次調査結果を受けて、奈良三彩小壺・唐式鏡・皇朝銭などの存在から、国家的祭祀の性格を保持していることが把握された（小田 2011：49頁）。

## (2) 沖ノ島祭祀遺跡の地域性

I段階の岩上祭祀段階からIV段階の露天祭祀段階に至るまで、国家的祭祀の性格の持続が指摘される沖ノ島祭祀遺跡であるが、同時に国内の国家的祭祀との関連が想定される他遺跡との差異も確認できる。

岩上～岩陰祭祀段階が属する古墳時代では、沖ノ島に類似する海上の島嶼例として、伊勢湾に浮かぶ三重県鳥羽市神島の八代神社所蔵の島内出土とされる神宝が知られる。しかし、これらの出土状況の詳細は不明で、古墳時代の遺物も画文帯神獸鏡・四神二獸鏡・頭椎大刀程度と多くない（大西 1955, 亀井 1969, 金子 2004・2005）。なお、瀬戸内海の島嶼にもいくつか古墳時代の祭祀遺跡が知られるが、現在までに確認されている出土遺物もあまり多くはなく、国家的祭祀との関連も想定されていない（千葉・松本 1979）。ヤマト政権中枢部の畿内では、奈良県桜井市三輪山西麓の祭祀遺跡（樋口 1928a・b, 和田編 1988）や天理市石上神宮いそのかみ禁足地出土遺物・伝世神宝（大場 1929, 和田編 1988）が知られる。山ノ神遺跡などの三輪山西麓の祭祀遺跡からこれまで知られる出土遺物は、小形素文鏡数点や子持勾玉のほかは多量の白玉などの滑石製模造品や土製模造品程度で、沖ノ島祭祀遺跡とは質・量的にも比較が困難である。石上神宮では、明治期の禁足地における発掘で素環頭大刀・勾玉・管玉類・琴柱形石製品などが出土しているほか、七支刀や巨大な鉄盾などの古墳時代の武具を伝世することで著名である。しかし、禁足地の出土遺物は古代・中世の遺物も含み、古墳時代の遺物もそれらの時期に埋納されたとみられ、古墳時代当初の状況は不明確な部分が残る。

沖ノ島祭祀遺跡の岩上～岩陰祭祀段階の出土遺物は、畿内の代表的な古墳の副葬品と全体的傾向が類似し、葬礼と祭祀の未分化的状況が研究当初から指摘される（鏡山・原田ほか 1958：246頁）。しかし、同時代の他の祭祀遺跡での同様の状況は依然不明確である。また、巨岩上の祭祀遺跡も沖ノ島以外では未確認である。

露天祭祀段階が属する奈良平安時代では、沖ノ島祭祀遺跡と同様に律令制下の国家的祭祀との関連性が想定される海上の島嶼遺跡が他地域でも知られる。

瀬戸内海では、岡山県笠岡市の大飛島<sup>おおびしま</sup>（洲の南）遺跡（鎌木・真壁 1964, 安東編 2012）が代表的である。また、三重県鳥羽市神島八代神社神宝も8・9世紀代の遺物が主体的である（大西 1955, 亀井 1969, 金子 2004・2005）。出土遺物の内容も沖ノ島に類似しており、奈良三彩小壺・唐式鏡・皇朝銭などからなる遺物組成が共通する。

しかし、沖ノ島祭祀遺跡は、宗像大島御嶽山遺跡（山田・重住・降幡 2012）や宗像大社辺津宮境内の高宮遺跡（花田 2012, 福嶋 2018）を除くと、他の祭祀遺跡ではほとんど知られていない舟形を中心に馬形・人形の滑石製模造品（形代）を多数伴う点にきわだった独自性がある。また、半岩陰・半露天祭祀段階頃から出現する有孔土器（有孔壺）や器台も、沖ノ島を中心に宗像地域以外では知られていない特有の祭祀用器種（形式）である。

### (3) 沖ノ島祭祀遺跡の傑出性と対外航路

このように、沖ノ島祭祀遺跡は、古墳時代の岩上祭祀段階から奈良平安時代の露天祭祀段階に至るまで、一貫して国家的祭祀に関わる代表的な遺跡として位置づけられる。その反面、他地域にあまり類例が見られない独自の特徴も持続する。この一見矛盾する性格の説明として、朝鮮半島や中国大陸に至る航路上の重要な位置を沖ノ島が占めることから、ヤマト政権の関与によって在来の沖ノ島信仰が国家的祭祀に発展したとする解釈とも結びついている。

しかし、魏志倭人伝に見られる朝鮮半島から倭に至る経路、元寇の際の元朝東路軍の侵略経路、豊臣政権期の朝鮮侵略経路、近世の朝鮮通信使の渡航経路は、いずれも同じである。先史時代～近世までの日本と朝鮮半島間の往来は、佐賀県東松浦半島・長崎県の壱岐・対馬を経由する極力安全な沿岸伝いの航路が基軸的な幹線である。ところが、沖ノ島に匹敵するような祭祀遺跡は、現在のところこれらの地域では未確認である（白石 2011: 185頁）。

そこで最近、沖ノ島祭祀遺跡の傑出性と九州から朝鮮半島への渡航経路を両立させる合理的解釈が、白石太一郎や重藤輝行らにより提唱された（白石 2011, 重藤 2011）（図4）。これらの仮説では、特に4世紀の倭による百済派

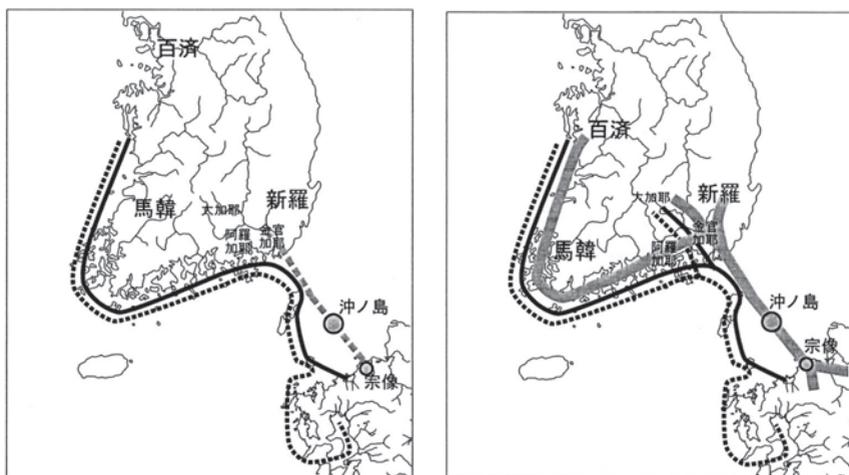


図4 重藤輝行による対外交渉ルート仮説 左：古墳時代中期前半・右：同中期後半  
出典：(重藤 2011)

兵航路に関連して、沖ノ島を航海安全祈願や飲料水の補給などの中継地として、従来の壱岐・対馬経路に加えて、宗像周辺の北部九州から朝鮮半島南部を最短距離で直接結ぶ航路の発達を想定する。しかし、この航路は、白石太一郎が指摘するように、近代以降の航海技術に基づく動力船の就航が前提の下関・釜山間の航路に近似する(白石 2011:185頁)。また、沖ノ島に給水や天候回復待ち目的などで多数の船舶が一時寄港する場合、十分な大きさの港湾確保や多数の人員の一時上陸滞在空間、さらには多量の飲食料の補給を、定住者と生産食料がほとんどない沖ノ島が単独で担うことになり、現代でもかなり難易度が高いように思われる<sup>2)</sup>。

沖ノ島祭祀遺跡が傑出した国家的祭祀の場になった要因は、さらに他の側面についても検討する余地があると考えられる。

### Ⅲ. 古代・中世宗像社の寄船・寄物と沖ノ島祭祀遺跡

宗像市の鐘崎をはさんで西の玄界灘と東の響灘の境界地帯にあたる宗像周辺の沿岸部の浜辺は、多くの漂着物（寄物）が打ち寄せられることで知られる。現在、日本各地の沿岸地域で盛んに実施されている文化的な観点からの漂着物研究のはじまりも、地元在住の石井忠によるこの地域での漂着物探索研究成果（石井 1977・1999）の貢献が大きい。石井忠によれば、冬季を中心に吹き付ける強い北西の季節風と時化により、宗像周辺の浜辺に多様な漂着物がもたらされるといふ。これに関連して、福岡県芦屋町では、「古くは寄物の多いようにと正月にお椀と箸を海に流す」（石塚ほか 1959：8頁）民俗慣習まであったとされる。そして、これらは宗像周辺沿岸地域特有の歴史文化形成に深く関わるとみられる。

室町時代頃の成立とされる『宗像宮創造記』では、「一 當神之奇（寄）船御進退ノコト、海邊東ハ葦屋津限、西ハ新宮湊及ナリ、財物・空船皆神物成事、御縁記（起）書之、社壇之被加修造而、財主可扶御誓願ト云」（川添編 2009：52頁）と記されている。つまり、現在の福岡県芦屋町から新宮町までの約40km間の沿岸に財貨（寄物）や船（寄船）が漂着した場合、それらは宗像神への供物として取得権があり、宗像社の修造用に宛てられるとしている。

中世の海運史研究の観点から宗像周辺沿岸部に注目した新城常三は、「宗像の海岸は難所をもって知られた玄界灘に臨み、西北の風を強く受けるだけでなく、暗礁が多く、また潮流も速いので、古来海難に遭うもの少なくなかった。とくに宗像海岸最北端の突起部で、響灘と玄界灘との境界に当たり、風波がとりわけ激突する鐘岬は、古来船人の最も恐れたところであった」（新城 1994：816頁、小島ほか 1966：653-654頁）とする。そのため、鎌倉時代の寛喜年間（1229-1231年）に勧進聖人往阿弥陀仏が鐘崎（鐘御崎）に「孤嶋」を築いて、海難事故の防止を図った。しかし、これによって宗像社の神郡宗像郡をはじめ宗像社領の主要な大小七十余社（七十五社）が古代以来過去数百年間修理の原資としていた寄船・寄物が不足することにつながる。そこで、宗像社はそ



図5 宗像市鐘崎と地島（中央）・大島（左奥） ※筆者撮影

の補償を朝廷に求め、朝廷はこれに応じて宗像郡曲村四十町を修理料として宗像社に寄進することで妥協したとされる（新城 1994：832頁，川添編 1992：5－7頁「御堀河天皇綸旨案：寛喜元年？」・20－23頁「官宣旨：寛喜3年」）。

古代・中世の記録に残る宗像社の寄船・寄物の取得権の源流は、それ以前からこの地域に存在したある種の入会権（入浜権）的な慣習的権利に求められ、それらは鐘崎・地島間の海峡（図5）を中心に玄界灘・響灘の安全な通航権などにも及んでいた可能性が考えられる。各時代の国内沿岸部各所に同様の慣習的権利が存在したと考えられるが、宗像周辺地域は難所の鐘崎沖を含むかなり広域な沿岸地帯で、なおかつ前近代の各時代の畿内と朝鮮半島・中国大陆を結ぶ日本の対外通航経路の大動脈に一貫して沿っている。

古墳時代の宗像地域を本拠に玄界灘の海上交通を掌握し、沖ノ島祭祀に関係していたのは、「胸肩君（宗像君）」一族と推測されている（小嶋 2012）。その「胸肩君」一族の領域を検討した小嶋篤の研究によれば、宗像地域の古墳に特徴的な宗像型石室とそれに関連する宗像系石室および土師器高坏 Ea（宗

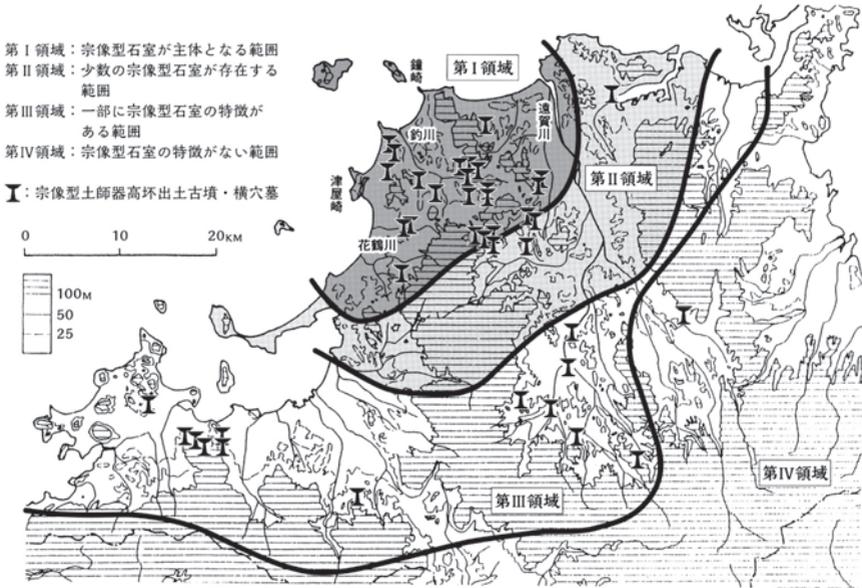


図6 宗像型石室と宗像型土師器高環の分布域 出典：(小嶋ほか 2017)

像型土師器高環)の地理的分布を基準にすると、宗像を中心に半同心円状の第I～第IV領域までの4つの領域に区分できることが明らかにされた(小嶋2012, 小嶋ほか 2017)。そして、そのもっとも中核的な第I領域は、東端は響灘側の芦屋町付近、西端は女界灘側の新宮町付近である(図6)。古代・中世の宗像社が強い影響力をもち、寄船・寄物取得権を有していた領域とほぼ完全に合致することが注目される。

古事記・日本書紀にその名が登場し、「海北道中」の「道主貴」と称された宗像三女神の神名は、表記に違いはあるが、「タキツ姫」・「タコリ姫」・「イチ(ツ)キシマ姫」である。そして、それらの由来は、潮流の渦巻き速く流れる様子、海上に発生する霧の様子、斎き祀る島とされる(亀井 2011:112頁)。4世紀以降のヤマト政権の強大化に伴い、それまで主であった近隣の地域間往來の船に加えて、畿内と九州北部の各地や朝鮮半島・中国大陆までも結ぶ多量の物資・人員を積載した船が、宗像周辺沿岸海域を多く通過する新事態が出現

した。そこでヤマト政権は、宗像周辺沿岸海域の通航権や寄船・寄物取得権を尊重・承認する形で、「胸肩君」一族を盟約関係に組み込んだ可能性が考えられる。難所である鐘崎を中心とする玄界灘・響灘の宗像周辺沿岸海域の安全な通航は、ヤマト政権の重要な関心事である。沖ノ島は、そこに大きな影響を与える北西からの風波が起きる源頭方向に位置する。これらが、在来の沖ノ島の祭祀を国家的祭祀へと発展させる要因であったとみられる。そして、沖ノ島祭祀遺跡の傑出した出土遺物の中には、ヤマト政権からの献納品のみでなく、時に寄船・寄物由来の財貨も含まれた可能性がある。また、露天祭祀段階に卓越して多くみられる沖ノ島特有の舟形滑石製模造品（形代）も、このような事情に関係するかもしれない。

#### IV. Cargo Cult と祭祀遺跡

在来の文化が、外来の質量ともに格段に豊かな物質文化に接触した時、化学反動的に急激な文化変化が生じる。

ニューギニア島を中心に、ソロモン諸島・ヴァヌアツ（旧ニューヘブリデス）諸島・フィジー諸島などのメラネシアは、欧米人との接触まで、ニューギニア島西部（イリアンジャヤ）の一部地域を除き文化史的には続新石器時代的な文化段階であった（伊藤 2001・2002）。しかし、19世紀後半～第二次世界大戦後にかけて、外来の欧米人の近代工業文明と急接触して植民地化され、その過程で在来の経済活動・社会組織や宗教的慣習の破壊的激変を余儀なくされた。伝統的生業と社会生活を支えてきた民俗知や慣習・宗教観ではまったく理解・対応が困難な事態に直面した。そこで、超自然的な至福の時期の到来を期待し、その準備をするような「千年王国的」運動として、欧米系軍民・日本軍の物質文化＝財貨 Cargo とそれらを満載した船や飛行機の招来を祖霊に祈願する Cargo Cult（積荷崇拜）が各地に出現した（Worsley 1968 [吉田訳 1981]）。初期段階では物心両面にわたる既存の価値観の破壊的再生が試みられ、その過程で主に欧米やキリスト教の物質文化の形態模写的文化が儀礼の場面に特徴的に多数出現した。

Peter Worsley の Cargo Cult に関する網羅的研究 (吉田 1981) で例示されている各地の儀礼用構築物と用具類を整理したものが表 1 である。Cargo を満載した船・飛行機の到来を祖霊に祈願して、港湾施設状または空港状の構築物と倉庫を建てるのが特徴的である。また、第二次世界大戦期のアメリカ軍や日本軍などの様相に影響を受けて、軍隊・基地関連施設の模倣や武器形の模造品も多い。その一環で、日本の神社風の構築物までも出現している。

なお、Cargo Cult の出現過程では、在来の信仰儀礼や信仰用具の破壊的刷新行為が特徴的にみられるが、祖霊への信仰そのものは変化せず、むしろ Cargo の本来の所有者で子孫への真の送り主として祖霊が強く認識されている (吉田 1981)。そうした中で、ヴァヌアツの Tanna 島では来訪神と祖霊がアメリカ兵姿で混然一体化した John Frum 信仰がある。Yasur 活火山に対する既存の山岳信仰も、Cargo をもたらす John Frum の飛行機の顕現地と目され信仰が強化されている (Muller 1974)。これらの Cargo Cult の中からは、欧米の物質文化などの形態模写的信仰を脱して、最終的に議会や法廷・組合・労働運動などの新たな社会組織の編成につながった事例も特徴的にみられる (吉田 1981)。

祭祀考古学の観点から沖ノ島祭祀遺跡の再検討を進めた笹生衛は、岩上～岩陰祭祀段階の出土遺物の組成状況が10世紀の『延喜式』や804(延暦23)年成立の『皇太神宮(内宮)儀式帳』と整合する部分が多いことから、その後の律令祭祀の先行的な事例として位置づけた(笹生 2012: 50頁)。そして、神の御形みかたの巨石群を仰ぎ、一定の広さのある場所での祭祀において奉獻品や神饌(食膳)を捧げた後、貴重な奉獻品類は巨岩(上部・裂目・下部)に納められ、神饌類は祭祀の場から撤下されたことで、実際には岩上～露天祭祀各段階の祭祀行為がほぼ共通することを推定する(笹生 2012: 50-55頁)。

笹生衛は、武器・武具・農・工具・鉄鋌・布帛類からなる祭具のセットが5世紀中頃までに成立し、6世紀代までに馬具が加わり、律令祭祀の「幣帛」の直接の起源になったことを推察する。そして、これらが4世紀後半から5世紀代の朝鮮半島・中国大陸からもたらされた最新の技術と素材で作られた最上の品々であったことを指摘する(笹生 2012: 48頁)。ちなみに、『皇太神宮儀式

表1 Worsley (1968) にみられる Cargo Cult 儀礼用構築物・用具類  
 ※PNG：パプアニューギニア，II：イリアンジャヤ，V：ヴァヌアツ，S：ソロモン諸島

国名・地域名	Cargo Cult 儀礼用構築物	Cargo Cult 儀礼用具	吉田訳該当頁
PNG・アピオベ村	欧米風の宴席	テーブル・椅子・花瓶	110-111
PNG・アピオベ村	キリスト教の教会風の神殿 (ahea uvi office)	テーブル・椅子・旗竿など	111-112
PNG・ブカ島	Cargo 運搬船用の埠頭・船渠風の構築物・Cargo 収納用倉庫	P および十字架印の旗・ライフル銃形木製模造品	154-155・158
II・ビアク島		軍服風自作衣装・ライフル銃形木製模造品など	191
V・エスピリトゥ＝サント島	Cargo 収納用倉庫		202
V・エスピリトゥ＝サント島	Cargo 運搬船用船渠・Cargo 運搬用の長さ数 km の海までの道路・無線塔風の構築物		206
V・マレクラ島	Cargo 運搬トラック用道路・Cargo 運搬飛行機用滑走路風の構築物		219
S・マライタ島	Cargo 収納用倉庫43棟1列		242
PNG・ランプブヨン島	Cargo 運搬船用の埠頭風の構築物		254
PNG・マーカム谷	通信施設風の建物	無線機形木製模造品・絶縁体形竹製模造品・ライフル銃形木製模造品・懐中電灯形籐製模造品	268
PNG・カインツ	商店風の建物	ライフル銃形木製模造品・ナイフ形木製模造品・紙に見立てた葉	271-272
PNG・高地	Cargo 運搬飛行機用滑走路風の構築物		247
PNG	飛行機形の Cargo 収納用倉庫		274
PNG・ウエワック近くの島	空港風の構築物		277
PNG・ブカ島	日本の神社風の構築物		277
PNG・マダン	アメリカ軍基地を模した村		286

帳』の祭祀の舞台である皇太神宮（伊勢神宮内宮）の建物配置と儀礼空間の特徴は、『日本書紀』が652（白雉3）年に完成したことを伝える難波長柄豊碓宮なにわのながらのとよきのみや（前期難波宮）に対応させた形という（笹生 2016：80-82頁，笹生 2018：20頁）。前期難波宮の建物配置は、それ以前から出現する矩形（方形）の区画意識や中心軸に沿って左右対称に建物を配置させる中国的な皇宮（宮都）建物配置設計採用の重要な到達点であることがよく知られる（橋本 2013，小澤 2003など）。

つまり、最新の外来系技術と最上の素材を揃えて祭具に供するヤマト政権の国家祭祀は、中国的な皇宮建物配置を意識した空間で行われることが本来一体であったことになる。これは、ヤマト政権の国家祭祀の有力な原型について、中国などの宮廷における儀礼の模倣という観点からも検討すべき必要性を示していると考えられる。たとえば、中国の宮廷における荘重な朝見（朝覲）儀礼の場で、遠近各地の貢納物産品や新技術の集合とそれに続く互酬的な下賜再分配などの構造を目にしたことが、ヤマト政権の政治・祭祀儀礼の原型の一つになった可能性も想定できる。ヤマト政権がそれらの政治・祭祀儀礼を通して広域的な物流と再分配を司り、中央のみでなく九州～東北までの各地方でも入り子状（ピラミッド状）に同様の儀礼が繰り返されることで、盟約関係の維持と中央集権化を促したかもしれない。それらが時の経過と地域の諸条件に応じてしだいに形骸化・省略化して変容する過程が、古墳時代とその後の祭祀遺跡の起源と形成に関係する可能性も考慮できる。

## V. 考 察

宗像沖ノ島祭祀遺跡と出土遺物の質と量の傑出性について、国家的祭祀や対外航路の航海安全祈願に関連させて解釈する定説を再検討した。特に、宗像周辺の寄船・寄物をめぐる地域史、さらにメラネシアにおける Cargo Cult 儀礼の物質文化事例を比較参照した。

沖ノ島祭祀遺跡は、古墳時代から奈良平安時代に至るまで、継続して国家的

祭祀に関わる代表的な遺跡として位置づけられるとともに、独自の地域の特徴も持続する。そして、この一見矛盾する性格の説明として、朝鮮半島や中国大陸に至る航路上の重要な位置を沖ノ島が占めることから、ヤマト政権の関与によって在来の沖ノ島信仰が国家的祭祀へ発展したとする解釈に結びついている。しかし、先史時代～近世まで佐賀県東松浦半島・長崎県の壱岐・対馬を経由する極力安全な沿岸伝いの対外航路が基軸的な幹線であるが、現在のところこれらの地域で沖ノ島に匹敵するような祭祀遺跡は未確認である。また、宗像周辺から沖ノ島を中継地にして朝鮮半島と直接結ぶ航路は、複数の要因から困難である。

そこで、古代・中世の宗像社の史料と民俗例などに注目すると、鐘崎沖を境とする響灘と玄界灘の海の難所に面した宗像周辺沿岸部では、寄船（漂着船）・寄物（漂着物）の取得が歴史的に地域の重要な経済的権益となっている。そして、その同じ沿岸海域は、前近代の各時代の畿内と朝鮮半島・中国大陸を結ぶ日本の対外通航経路の大動脈が一貫して沿っている。これらが、宗像周辺海域の通航権や寄船・寄物取得権を尊重・承認する形で、「胸肩君」一族をヤマト政権が盟約関係に組み込んだ理由とみられる。同時に、それらに強い影響を及ぼす北西の風波の源頭方向に沖ノ島が位置することから、在来の沖ノ島信仰が国家的祭祀に発展した要因になったと推測した。

なお、笹生衛は、律令祭祀の「幣帛」の起源を、沖ノ島祭祀遺跡でみられる武器・武具・農・工具・鉄鋌・布帛類からなる5世紀中頃までに成立した祭具のセットに求める。これらが4～5世紀代の朝鮮半島・中国大陸からもたらされた最新の技術と素材で作られたものであったことを指摘する。そして、その史料的根拠となった皇太神宮の建物配置と儀礼空間の特徴も、中国の皇宮（宮都）に類似した構造の7世紀の難波長柄豊碕宮（前期難波宮）である。そこで、ヤマト政権の政治・祭祀儀礼全般の原型としても、中国などの宮廷における朝見儀礼の模倣との関連性についても検討の余地があることを指摘した。

## 註

- 1) 学術調査以外の近現代における沖ノ島からの遺物持ち出し状況については、花田勝広が詳細に整理している（花田 2012）。
- 2) 宋人と密接な関係があった中世の宗像社・宗像氏（宗像大宮司氏）は、対外通商航路の中継拠点として壱岐を重視し影響力を強めた。そのため、宗像と壱岐の中間に位置する小呂島（福岡市西区）が重要であり、小呂島の支配をめぐる博多在住の宋商（綱首）である謝国明などと宗像氏との間で訴訟沙汰も起きている（服部 2011、川添編 1992：86-89頁）。

## 引用・参考文献

- 安東康宏編 2012『大飛鳥の遺跡と砂洲』、笠岡市教育委員会（岡山）
- 石井 忠 1977『漂着物の博物誌』、西日本新聞社（福岡）
- 石井 忠 1999『新編 漂着物事典』、海鳥社（福岡）
- 石塚尊俊ほか 1959「海辺の窮民」、『日本残酷物語』第1部貧しき人々のむれ：3-18頁、平凡社（東京）
- 伊藤慎二 2001「ニューギニア島の先史時代におけるパプアニューギニア高地の位置」、『ツンドラから熱帯まで：加藤晋平先生古稀記念考古学論文集』（博望第2号）：58-73頁、東北アジア古文化研究所（千葉）
- 伊藤慎二 2002「パプアニューギニア高地の先史時代」、『東南アジア考古学』第22号：179-208頁、東南アジア考古学会（東京）
- 伊藤慎二 2013「神社博物館と考古資料」、『神社博物館事典』：273-284頁、雄山閣（東京）
- 大場磐雄 1929『石上神宮寶物誌』、石上神宮（奈良）〔復刻 1980、吉川弘文館（東京）〕
- 大西源一 1955「志摩神島八代神社の古神宝」、『國學院雜誌』第56巻第2号：125-130頁、国学院大学出版部（東京）
- 岡崎敬・小田富士雄ほか 1979『宗像 沖ノ島』本文・図版・史料、宗像大社復興期成会、吉川弘文館（東京）
- 岡寺未幾・大高広和 2018「文献解題 沖ノ島研究の歩み」、『世界のなかの沖ノ島』（季刊考古学別冊27）：146-151頁、雄山閣（東京）
- 小澤 毅 2003『日本古代宮都構造の研究』、青木書店（東京）
- 小田富士雄 1979「第4章 沖ノ島祭祀遺跡の時代とその祭祀形態」、『宗像 沖ノ島』本文：254-266頁、宗像大社復興期成会、吉川弘文館（東京）
- 小田富士雄 2011「沖ノ島祭祀遺跡の再検討：4~5世紀宗像地方との関連で」、『〈宗像・沖ノ島と関連遺産群〉研究報告』I：39-70頁、「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議・福岡県企画・地域振興部総合政策課世界遺産登録推進室（福岡）

- 小田富士雄 2012「沖ノ島祭祀遺跡の再検討 2」,『〈宗像・沖ノ島と関連遺産群〉研究報告』Ⅱ-1:1-41頁,「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議・福岡県企画・地域振興部総合政策課世界遺産登録推進室(福岡)
- 小田富士雄 2013「沖ノ島祭祀遺跡の再検討 3」,『〈宗像・沖ノ島と関連遺産群〉研究報告』Ⅲ:1-42頁,「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議・福岡県企画・地域振興部総合政策課世界遺産登録推進室(福岡)
- 小田富士雄監修(宗像大社文化財管理事務局編) 2003『〈海の正倉院〉沖ノ島:宗像大社神宝館 沖ノ島大国宝展記念』,宗像大社(福岡)
- 鏡山 猛 1961「第八章第二節結び」,『沖ノ島:宗像神社沖津宮祭祀遺跡』続:286-288頁,宗像神社復興期成会(東京)
- 鏡山猛・原田大六ほか 1958・1961『沖ノ島:宗像神社沖津宮祭祀遺跡』正・続,宗像神社復興期成会(東京)
- 金子裕之 2004「三重県鳥羽八代神社の神宝」,『奈良文化財研究所紀要』2004:66-67頁,国立奈良文化財研究所(奈良)
- 金子裕之 2005「鳥羽八代神社の神宝 2」,『奈良文化財研究所紀要』2005:24-25頁,国立奈良文化財研究所(奈良)
- 鎌木義昌・真壁忠彦 1964『大飛鳥:古代の祭祀』(倉敷考古館研究小報1),倉敷考古館(岡山)
- 亀井輝一郎 2011「古代の宗像氏と宗像信仰」,『〈宗像・沖ノ島と関連遺産群〉研究報告』Ⅰ:105-129頁,「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議・福岡県企画・地域振興部総合政策課世界遺産登録推進室(福岡)
- 亀井正道 1965「志摩神島八代神社神宝の意義」,『石田博士頌寿記念東洋史論叢』:177-194頁,石田博士古稀記念事業会(東京)
- 川添昭二編 1992『宗像大社文書』第1巻本編(2分冊の1),宗像大社復興期成会(福岡)
- 川添昭二編 2009『宗像大社文書』第3巻本編(2分冊の1),宗像大社復興期成会(福岡)
- 小嶋 篤 2012「墓制と領域:胸肩君一族の足跡」,『九州歴史資料館研究論集』37:1-26頁,九州歴史資料館(福岡)
- 小嶋篤ほか 2017『特別展 宗像・沖ノ島と大和朝廷』,九州国立博物館(福岡)
- 小島鉦作ほか 1961・1966『宗像神社史』上・下巻,宗像神社復興期成会(東京)
- 笹生 衛 2012「日本における古代祭祀研究と沖ノ島祭祀:主に祭祀遺跡研究の流れと沖ノ島祭祀遺跡の関係から」,『〈宗像・沖ノ島と関連遺産群〉研究報告』Ⅱ-1:43-70頁,「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議・福岡県企画・地域振興部総合政策課世界遺産登録推進室(福岡)
- 笹生 衛 2016『神と死者の考古学:古代のまつりと信仰』,歴史文化ライブラリー417,吉川弘文館(東京)

- 笹生 衛 2018 「沖ノ島祭祀の実像」, 『世界のなかの沖ノ島』(季刊考古学別冊 27): 19-24 頁, 雄山閣(東京)
- 重藤輝行 2011 「宗像地域における古墳時代首長の対外交渉と沖ノ島祭祀」, 『〈宗像・沖ノ島と関連遺産群〉研究報告』I: 71-104 頁, 「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議・福岡県企画・地域振興部総合政策課世界遺産登録推進室(福岡)
- 白石太一郎 2011 「ヤマト王権と沖ノ島祭祀」, 『〈宗像・沖ノ島と関連遺産群〉研究報告』I: 173-195 頁, 「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議・福岡県企画・地域振興部総合政策課世界遺産登録推進室(福岡)
- 新城常三 1994 「第二節 寄船・寄物考」, 『中世水運史の研究』: 813-861 頁, 塙書房(東京)
- 千葉幸伸・松本敏三 1979 「第二章 瀬戸内海をめぐる祭祀遺跡」, 『瀬戸内の海上信仰調査報告(東部地域)』: 3-56 頁, 瀬戸内海歴史民俗資料館(香川)
- 橋本輝彦 2013 「④豪族居館と大王の宮」, 『古墳時代の考古学』6(人々の暮らしと社会): 116-129 頁, 同成社(東京)
- 服部英雄 2011 「宗像の島々: 小呂島, 沖ノ島, 大島の歴史と地誌」, 『〈宗像・沖ノ島と関連遺産群〉研究報告』I: 131-168 頁, 「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議・福岡県企画・地域振興部総合政策課世界遺産登録推進室(福岡)
- 花田勝広 2012 「1. 宗像地域の古墳群と沖ノ島祭祀の変遷」, 『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』第15回九州前方後円墳研究会北九州大会発表要旨・資料集: 1-74 頁, 第15回九州前方後円墳研究会北九州大会実行委員会(福岡)
- 樋口清之 1928a 「奈良県三輪町山ノ神遺跡研究」, 『考古学雑誌』第18巻第10号: 647-657 頁, 考古学会(東京)
- 樋口清之 1928b 「奈良県三輪町山ノ神遺跡研究」, 『考古学雑誌』第18巻第12号: 771-787 頁, 考古学会(東京)
- 福嶋真喜子 2018 「下高宮を中心とした辺津宮境内発見の祭祀品について」, 『沖ノ島研究』第4号: 53-58 頁, 「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議(福岡)
- 安丸良夫 1979 『神々の明治維新: 神仏分離と廃仏毀釈』岩波新書(黄版)103, 岩波書店(東京)
- 山田広幸・重住真貴子・降幡順子 2012 『大島御嶽山遺跡』, 宗像市文化財調査報告書第64集, 宗像市教育委員会(福岡)
- 和田萃編 1988 『大神と石上: 神体山と禁足地』, 筑摩書房(東京)
- Muller, Kal 1974 Tanna Awaits the Coming of John Frum, *National Geographic* Vol.145 No.5: pp.706-715, National Geographic Society (Washington)
- Worsley, Peter 1968 *The Trumpet Shall Sound: A Study of 'Cargo' Cults in Melanesia*, Granada Publishing Ltd. (London) [吉田正紀訳 1981 『千年王国と未開社会: メラネシアのカーゴ・カルト運動』, 紀伊国屋書店(東京)]

2014年に本学着任以来、たびたびオセアニアの人類学について、大谷裕文先生より懇切なご教示を賜り、また先生が長年にわたって蔵書を整えられた大学図書館のオセアニア文化人類学関係の文献を利用して頂く恩恵に恵まれました。次にお目に掛かる際にまたご教示を乞うことを楽しみにしていた2017年の秋に突然のご入院とご逝去の報に接し、永久にその機会を失ってしまったことが本当に悔やまれます。心よりご冥福をお祈りし、謹んで小文を呈上致します。